

竹製品のデザイン開発

－ 原竹（丸竹）材による製品化Ⅱ －

宮内 孝昭 福留 重人

現在、竹製品として一般に市場に出まわっているものは、伝統工芸品的な職人の手づくりによる高級品か、箸・しゃもじなどのような日用雑貨品に、二分化しているように思われる。そこで、その中間的価値感を持つようなものの、製品化ということをテーマにして第二次試作の製品開発を試みたものである。

1. はじめに

前回と同様、丸竹材に彩色を施すという点にポイントを置いて取りくみ、カシュー塗料を使用した。カシューの使用理由としては、塗膜の外観ならびに性能が天然漆のそれと、酷似しているので、天然漆の代替品としてカシュー塗料の右に出るものはないという点、そして、基本色を混合すれば多種色彩を作り出せるという点である。そこで、それを使用し付加価値を高め、中間層の竹製品のデザイン開発を試みたものである。

2. デザイン構成

(1) 開発内容について

1) 原竹（丸竹）材製品……（孟宗竹材を利用した製品開発）

1. 従来の竹製品に加わる中間的、価値感を持つ竹製品の開発

- 2. 品質向上、資源の有効利用
- 3. 技術移転

2) 異種材との組み合わせ

- 1. 工芸品と同等の付加価値の高い製品開発
- 2. 新しいクラフト群の開発
- 3. 県産品の製品構成の再構築
- 4. 技術移転

(2) 開発の概要

原竹（孟宗竹）を利用し本県、竹製品群に加わる新しい中間層の製品開発を図るもので、下記の条件を設定し業界振興に資する。

1. 開発対象品

- a. 花筒（4種－8点）
- b. 小物入れ（スタッキング可能）
- c. ビール袴（3点）
- d. 照明具（4点）
- e. ペンシルスタンド（2点）
- f. 回転式ボトル台

(3) 開発意図

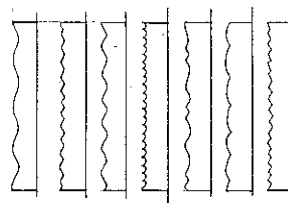
- a. 機能性と共に装飾的要素を形態色調などに表現する。
- b. 既製概念に捕われることなく、新しい感覚でまとめる。
- c. インテリア調度品としても、可能な仕上げ。
- d. ヤング層への浸透も考慮し、市場拡大に役立てる。

3. 試作品の設計・仕様

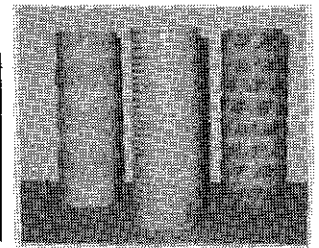
① 花筒

ロクロ

ロクロ加工によって、表皮を削り、なめらかなフォルム・歯切れの良いフォルムを生み出す。花器には原色は、合わない為、塗料（カシュー）の性質を生かし混合した淡い色彩を彩色し、竹の持つ色合いと調和を持たせるようにした。



(図-1)

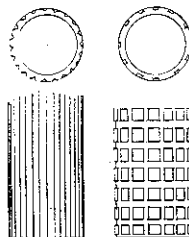


(写真1)

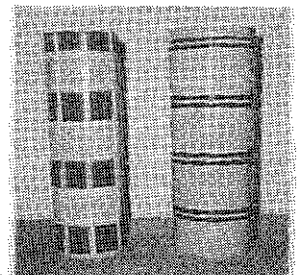
② 花器

（彩色パターン刷り込み仕上げ）

昇降盤を利用し、横方向の削り・縦方向と横方向の削りの組み合わせによる凸部分の彩色のおもしろさを狙ったものである。



(図-2)

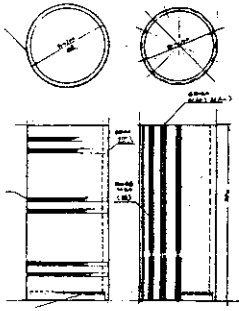


(写真2)

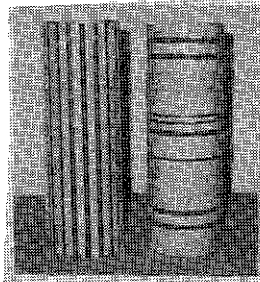
③ 花器

(皮、象嵌裝飾)

異種材との組み合わせにより、竹の持つ違った面を引き出そうということより、昇降盤を利用し、縦方向、横方向に浅い溝を削り、皮の象嵌を行ったものである。



(図-3)

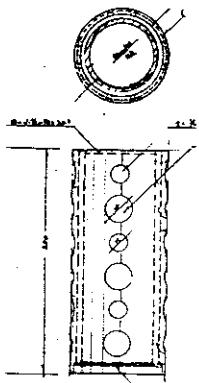


(写真3)

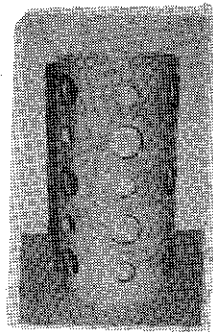
④ 花器

(二重筒式・刷り込み仕上げ)

ユニークさ、ムーブメントを出す為に、竹に削孔し、入子式にすることにより竹材と色彩との調和を持たせた二重花器である。



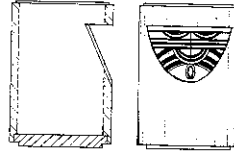
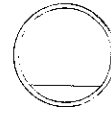
(図-4)



(写真4)

⑤ 小物入れ

デザイン・スタイリング・機能性は、第一次試作とほぼ同じであるが、違いは節間を使わずに底面部に木材を試用したことで、簡単に確実に、スタッキング出来るようになった。塗装は塗膜の外観ならびに、性能は天然漆のそれと酷似しているカシュー塗料を使用した。顔面部分は安価な合板を使用。顔面のデザインは、手描きで行った。



(図-5)



(写真5)

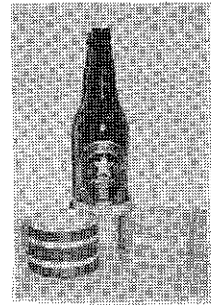
⑥ ビール樽

現在、市場に出回っている樽は、竹そのものの素材のままのものがほとんどである。そこで、ロクロ加工等を併せ、思いきった彩色を施すことにより、鮮やかな明るい新しい竹のイメージをつくり出そうと取り組んだものである。

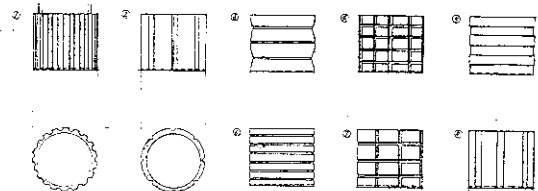
なお、割れ防止の為、表皮、内皮ともに削り取ってある。底面部分は、変形防止も兼ねて耐水合板を使用した。



(図-6)



(写真6)



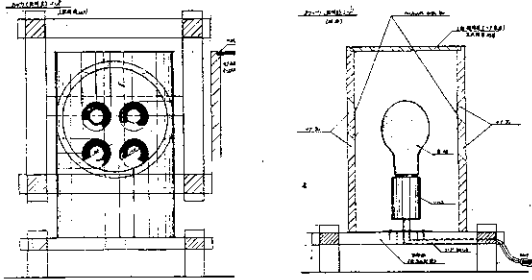
(図-7)

⑦ 照明具

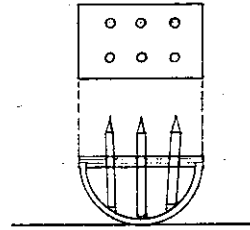
昔話にもあるように、竹に光というのは結び付けて考えられているように思われる。

そのあたりより、大径丸竹を使用し竹らしい光を創り出そうと、取りくんだ照明具のデザイン開発である。ロクロ加工を利用し割れ止めの為、表皮を削り取った。光

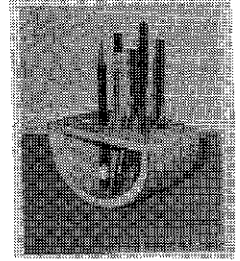
のコントラストを出す為に角度を持たせた三コ、四コの穴を削孔した。また、上蓋は変形防止と統一性を兼ねた竹集成材を使用した。また、枕頭用として台も、集成材を使用した。彩色は、横ライン、縦ラインと削孔穴、削孔のみ、全面的四種の彩色を行った。



(図-8)



(図-10)

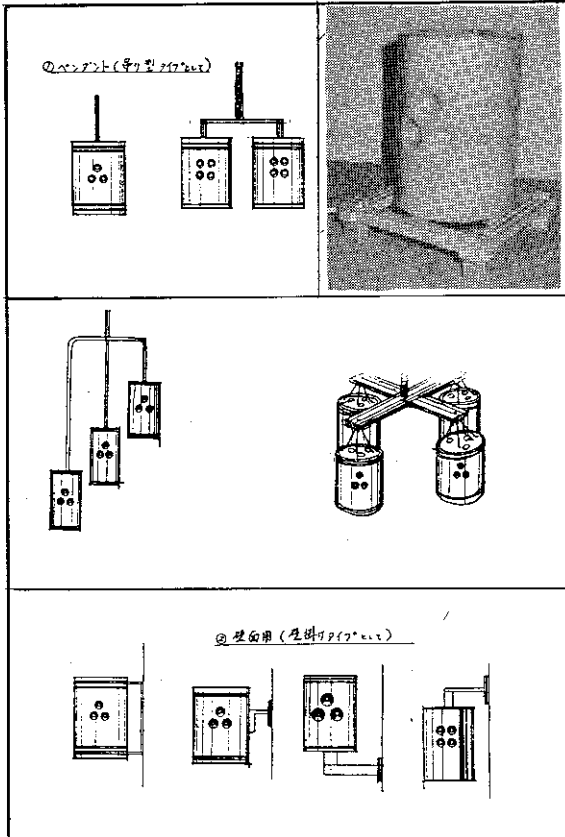


(写真8)

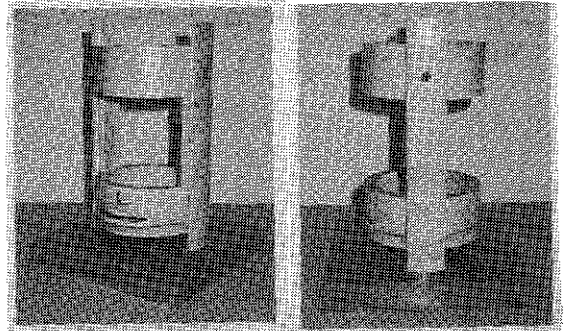
⑨ 回転式ボトル台

焼酎と竹とは調和するという点から考えた、竹と木を組み合わせたアイデア製品である。

一升ビンが入る(多少のスキ間)大径の竹材を利用し、湯抜き竹の自然表皮を活かし節間を残し、そのまま底板に利用する。銘柄の見える程度に間隔をあげ、竹材で繋いだ。柱も竹材を使い、台と回転ダボのみ木材を使用した。



(図-9)



(写真9)

(写真10)

3. まとめ

原竹(丸竹)材による製品化の第二次試作として開発を行ったが、次のようなことを研究成果として得ることが出来た。

(花器)

- ・実際、製品とするには底部に石膏等を付着させ、重量感を増し、安定感を持たせねばならない。

- ・生ける花を殺さない程度の淡い色彩で、かつ、竹の色に調和する色彩の選択が、必要である。

- ・カシュー塗料を彩することにより、動き、明るさが出て、付加価値が高められた。

(小物入れ)

- ・カシュー塗料によって、色の美しさ、光沢、肌ざわりが良くなり、付加価値が高まった。

⑧ ベンスタンド

木材と竹を組み合わせたシンプルデザインとして、デスク用品のベンスタンドを考え、表皮付きの半割り竹、表皮を削り取った竹の二種を試作した。竹の廃材利用ということにも、繋げてゆけると考えられる。

。底部に木材を使うことにより、製品としての重みが加わった。

(ビール樽)

。底板の加工法を工夫すれば、大量生産向きの製品といえよう。

(照明具)

。職人の手づくりによる高級品と、雑貨品との中間層の製品に仕上げられたのではないかと、思われる。

(ペンスタンド)

。廃材利用で量産向きの製品に仕上がったのではないか。

(回転式ボトル台)

。製品化する場合、価格しだいでは、売れる商品としての可能性を持ったユニーク商品になるよう考えられる。

【割れについて】

表皮と内皮を削った(ビール樽・照明具)は、ほとんど割れていない。表皮は削ってあるが、内皮は、そのままの(小物入れ・花器)には、多少の割れが入っている。特に、目立ったのがロクロ加工による凸部の割れである。凹部の割れは、ほとんど見られない。

以上のように、諸問題点はあるが、製品化、出来る段階まで近づいて来ていると思われる。今後は、問題点を解消し、ぜひとも意欲ある企業への技術移転を実現させたい。

参考文献

- 1) 芳武茂介：用のかたち・用の美 25 1964